

ズブズブ班

サイタニー郡とドンクワイ村の通時的変化
聞き取り調査で得られた情報から

加藤久美子、イサラー・ヤーナターン（名古屋大学）

キーワード：ドンクワイ村、歴史、人口、稲作

Changes of Population and Rice Production of Dong Khwaay Village
from information gained in interviews

Kumiko KATO, Isra YANATAN (Nagoya University)

Keywords: Dong Khwaay Village, History, Population, Rice Production

要旨

聞き取り調査で得た情報をもとに、ドンクワイ村の人口変化と稲作の変化の傾向を示し、考察した。その内容は以下のようである。

1) ドンクワイ村の人口は、1920 - 30年から1970年代前半までは増減を繰り返しつつも80世帯を大きく超えることはなかったが、1970年代後半からは人口は全体として増加の方向に向かった。1985 - 1995年にもっとも人口増加が激しかった。

2) 浮稲栽培は、1976(1977)年のマークヒョウ川河口への堰の設置以降拡大していき、1979 - 1984年には最盛期を迎えた。だが、1984年に村の南部で乾季作がはじまると、翌年から浮稲の作付け減少が始まる。1994 - 1995年に浮稲生産が洪水のために大きく減少したあと、1996年には乾季作用の灌漑水路ができて乾季作の作付け面積が最大になった。浮稲栽培の盛衰には環境変化が大きな要因として働いているが、一方で浮稲栽培の衰退と乾季作拡大の間に相関関係も見られる。

今後の調査項目としては、1970年代後半以降の人口増加の要因とみなされる、ドンクワイ村を取り巻く社会的・生態的環境変化を特定すること、ドンクワイ村での悉皆調査の結果分析によって、人口増減の原因をさぐる、国勢調査のデータによって、1995年と2005年の人口・戸数・世帯数の正確な数値を確認すること、

聞き取り調査などによって、個々の世帯で浮稲生産から乾季作への転換が起こったのかどうかを確認すること、などが挙げられる。

1. はじめに

ドンクワイ Dong Khwaay 村において、ズブズブ班のメンバーは、これまで各自の関心にもとづいて聞き取り調査をおこなってきた。その結果として得られた情報は、個々人の問題関心に即したものであるが、同時にドンクワイ村の概況を知る上で共有されるべき情報を含んでいる。

さて、ズブズブ班のメンバーが聞き取り調査で得た情報の中から年代・時期がわかるものを集約してみると、そこからは、ドンクワイ村でこれまで起こってきた諸変化の大まかな流れを読み取ることができた。本稿は、そのうち、村落人口の変化と稲作の変化に関する部分を示して考察を加え、さらにそれに関して今後どのような調査を加えていくべきかを考えるものである。

2. ドンクワイ村の人口変化

聞き取り調査では、1920-30 年以降の戸数・世帯数・人口の変化について具体的情報を得ることができた。その情報を列挙すると、以下のようになる。

1920-30 年	70 戸 (Lang Huan)
1945 年ごろ	70-80 戸
1947 年	約 50 戸
1951 年	45-6 戸
1957 年以後	人口が増加しはじめる
1968 年	ドンクワイ村からドンパーン Dong Phaang 村に 25 戸の移住があった
1970 年代	80 世帯 (Khrua Huan)、400 人
1975 年か 1976 年	ドンクワイ村が、ドンクワイ・ノイ Dong Khwai Noi 村 (ドンクワイ・タイ Dong Khwai Tai 村) を合併する
1975-1976 年	約 100 戸
1985 年ごろ	130 世帯、700 人以上
1995 年ごろ	1100 人以上
2005 年	264 世帯

まず 1945 年から 1947 年の間に 20 - 30 戸の減少があったことが指摘できるが、その原因は不明である。移住・分村があった可能性もある。

その約 10 年後の 1957 年からは人口が増加しはじめたというが、どれほどの規模の増加であったかはわからない。人口増加の原因としては、自然増も考えられるが、移民を受け入れたことによる増加であったかもしれない。特に、1960 年代には北部から戦争を避けてやってきた移民がサイタニー郡全体に流入しており、ドンクワイ村もその移民の一部を受け入れた可能性がある。これらについては、ズブズブ班全体の調査としてなされたドンクワイ村悉皆調査の結果を詳しく分析していくことによって、ある程度明らかにできるであろう。

1968 年には、移住により 25 戸ほどの減少があったが、移住後に残った戸数に関する情報はない。1975 年あるいは 1976 年には、今度は、ドンクワイ・ノイ村合併による人口増加があった。増加戸数・人口の具体的な数値は不明だが、1967 年の時点でドンクワイ・ノイ村には 14 戸あったということから考えると、十数戸から 20 戸前後の戸数増があったものと見てよいだろう。1970 年代に 80 世帯とするデータと 1975-1976 年に 100 戸とするデータの間の差は、ドンクワイ・ノイ村合併による人口増加を反映しているものと考えられる。

その後は、ほぼ 10 年おきのデータしかないが、全体としては増加傾向にあることが読み取れる。1975-1976 年に 100 戸であったものが 1985 年ごろには 130 世帯となっており、戸数と世帯数という単位の違いはあるものの、増加を示しているものと見てよい。さらに、1985 年ごろには人口 700 人以上であったのが、その 10 年後の 1995 年ごろには人口 1100 人以上となっており、人口にして 400 人規模の増加が見られる。もし、一世帯の人数を 5 人として計算すると約 80 世帯の増加ということになり、1995 年ごろには村は 210 世帯前後の規模であったことが推測される。さらにその 10 年後の 2005 年には 264 世帯という数値が出ており、10 年で 55 世帯前後の増加があったと言える。

以上をまとめてみると、ドンクワイ村の人口は、1920 - 30 年から 1970 年代前半までは、移住などによって増減を繰り返しつつ、多いときでも 80 世帯を大きく超えることはなかったものと予測できる。そして、1970 年代後半からは、村の合併なども含めて、人口は全体として増加の方向に向かった。もっとも人口増加が激しかった時期は、1985 年から 1995 年までであったようである。

このドンクワイ村における人口増加は、ちょうど内戦が終了した時期から始まっている。内戦終了後にドンクワイ村を取り巻く社会・生態環境にどのような変化があったか、特に 1985 年から 1995 年までにどのような状況にあったかは、人口増加の背景として今後調査していくべきことがらである。例えば、交通状況の改善という面では、1978 年に村と国道 13 号線を結ぶ道がつくられ、1988 年にその道が広げられたなどの変化があるが、それと人口増加がどのように関係しているか、などの視点も重要であろう。

一方、人口・戸数・世帯数のより正確な数値を求めたり、人口増減の原因をさぐったりする努力もしていきたい。先にも述べたように、まず、村での悉皆調査の結果分析が必要であろう。また、1995年と2005年には国勢調査がおこなわれているので、そのデータを確認することによって、それぞれの年の人口・戸数・世帯数の正確な数値を確認することができるだろう。

3. 稲作に関する変化

ドンクワイ村における稲作の変化については、浮稲栽培に関するものと乾季作に関するものと、大きく二つに分けてまとめることができる。

1) 浮稲

浮稲は、1968年にタイ国東北部から入ってきたという。1976年あるいは1977年にはマークヒョウ川河口に堰ができ、ドンクワイ村でも浮稲の栽培ができるようになった。それ以前は毎年雨季には広い範囲が洪水になっていたのに、堰ができると水位が上がらなくなったため、浮稲の栽培が可能になったのである。1979年から1984年にかけては、浮稲作付面積が最大で180ヘクタールになったという。

ところが、1985年になると浮稲の作付け減少がはじまっている。そして、1994 - 1995年には、洪水により浮稲生産が大きく減少した。2004年には、浮稲の作付け面積が5ヘクタールあまりと、盛時の3パーセントほどまで縮小している。最近では、マークヒョウ川の水位が高くなり、浮稲栽培が困難になったという。マークヒョウ川の水位が高くなったのは、上流の森がなくなったことが原因のひとつと考えられる。

2) 乾季作

1981 - 1984年に初めて乾季作が行われたが、その時は塩害が出てしまったという。1984年に、村の南部、すなわち現在乾季作がおこなわれている場所での乾季作が開始された。そこは、ヤン Yaang 川に沿った氾濫原であり、ナー・セン Naa Seng (乾季作の田という意味)と呼ばれている。1979年と1980年の2年間は、ここで共同耕作がおこなわれ、その後は各世帯に田が分割された。1996年には、ナー・センに灌漑水路ができた。この時には、70世帯以上がナー・センでの乾季作に従事しており、乾季作作付け面積が最大の96ヘクタールとなったという。

3) 浮稲栽培盛衰と乾季作の拡大

浮稲栽培拡大は、前述のように、マークヒョウ川河口への堰の設置という人為的になされた環境変化が原因となっている。1994 - 1995年に浮稲生産が大きく減少したのは、洪水という自然災害が原因となっている。このうち、1995年にはサイタニー郡の各地に大洪水が起こったことがわかっている。また、最近浮稲栽培が困難になったのは、マークヒョウ川の水位が高くなったのが原因であり、その背後には、上流の森の消滅という生態環境の変化があった。浮稲栽培の盛衰に関する以上の変化は、人為的あるいは自然の環境変化を原因としていると言える。

しかし、1985年以降浮稲の作付け減少が始まった原因、そしてその後も生産が縮小されていった原因については明確ではない。ただ、その背後には乾季作の拡大があり、それが原因とは言えないまでも、浮稲生産の減少を補完していたと考えることはできる。例えば、ナー・センでの乾季作が始まったのは1984年であり、その翌年の1985年から浮稲の作付け減少が見られる。浮稲生産が洪水により大きく減少したあとの1996年には、乾季作用の灌漑水路ができ、作付け面積が最大の96ヘクタールに到っている。このように、浮稲栽培の盛衰と乾季作の拡大の間には、相関関係が見られるのである。

この点についても、個々の世帯で本当に浮稲生産から乾季作への転換が起こったのかどうか、聞き取り調査などによって確認する作業が必要だと思われる。

Abstract

We find the following by examining data obtained in interviews with villagers of Dong Khwaay Village.

1) Population and the number of households of Dong Khwaay Village since 1920 - 30 until the first half of 1970s ebbed and flowed, but did not far exceeded 80 households. Dong Khwaay Village has been gaining population since the second half of 1970s. Between 1985 and 1995, there was the most rapid expansion of the population.

2) Floating rice cultivation of Dong Khwaay Village started to expand after the estuarial barrier dam of the Maak Hiew River was constructed in 1976 (1977) and was at its peak between 1979 and 1984. Planting of floating rice, however, began to decrease at 1985, whose previous year is the first year that dry season rice was cultivated in the southern area of the village. Because of floods in 1994 - 1995, floating rice cultivation was decreased drastically. At the following year, irrigation canals were constructed in the dry season rice fields and dry season rice became to be cultivated in the largest area.

Rise and fall of floating rice cultivation have been influenced by environmental changes. On the other hand, fall of floating rice cultivation correlated with expansion of dry season rice cultivation.